

中学校社会科教育における 「身近な地域の歴史」学習の意義について

—総合的な学習の時間との連携の重要性—

中野 修一

はじめに

2021（令和3）年4月から新学習指導要領がいよいよ全面实施となる。中学校社会科の歴史的分野では、歴史学習の初めの年代の表し方や時代区分の意義などの歴史学習の基本的事項を学ぶあとに、「身近な地域の歴史」についての学習が設定され、さらに大きな項目として扱われており、旧学習指導要領での位置付けよりもさらに重要視されるようになったように見える。

旧学習指導要領での「身近な地域の歴史」の扱いは、「目標」の最後の項目として「(4) 身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味・関心を高め、様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる」とあり、「内容(1) 歴史のとらえ方」においては「イ 身近な地域の歴史を調べる活動を通して、地域への関心を深め、地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解させるとともに、受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め、歴史の学び方を身に付けさせる」となっている⁽¹⁾。

今次平成29年版学習指導要領では、「目標」の中には記述はないものの、「内容」の「A 歴史との対話」における2つ目の内容として「(2) 身近な地域の歴史」が設定されている⁽²⁾。

（図表1）

2) 身近な地域の歴史

課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

（ア）自らが生活する地域や受け継がれてきた伝統や文化に関心をもって、具体的な事柄とのかかわりの中で、地域の歴史を調べたり、収集した情報を年表などにまとめたりするなどの技能を身に付けること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

（ア）比較や関連、時代的な背景や地域的な環境、歴史と私たちとのつながりなどに着目して、地域に残る文化財や諸資料を活用して、身近な地域の歴史的な特徴を多面的・多角的に考察し、表現すること。

と記述されており、旧学習指導要領の記述内容と比較しても、基本的な学習のねらいや内容に変化はないものの、その位置付けが高くなったことは注目に値する。

地理的分野における「地域調査」学習は、旧学習指導要領では「世界の様々な地域」における「世界の様々な地域の調査」と、「日本の様々な地域」における「身近な地域の調査」となっていたが、現学習指導要領では、世界の国々の調査はなくなり、「日本の様々な地域」における「(1) 地域調査の手法」と「(4) 地域の在り方」のみとなっている。つまり、地域の調査学習の位置付けが高くなっていることが分かる。

現状の地域の歴史の調査学習は、中学校社会科歴史的分野の学習内容が多いためか、「身近な地域の歴史」の学習に手が回らず、一つの単位として扱われることなく休業中の課題として扱われたり各時代の学習で関連ある事項として短時間で扱われたりしている場合が多いように思われる。

なぜ、地域調査学習の位置付けがこのように高くなったのだろうか。また、地域の地理や歴史を学ぶことはどのような意義があるのか、本稿では、特に「身近な地域の歴史」を学習する意義について改めて考察するとともに、「総合的な学習の時間」との関わりと連携した学習のしかたについても考えてみたい。

1. 「身近な地域の歴史」学習の変遷

はじめに、学習指導要領における「身近な地域の歴史」の学習についての位置付けはどのようなものであったのだろうか。この点を確認しておきたい。

学習指導要領における「身近な地域の歴史」の変遷については、福井延幸氏の論考（「中学校社会科『身近な地域の歴史』学習の研究—『落合』を素材として」）に詳しく述べられている。福井氏の論考で内容の変遷が詳しく述べられているので、氏の論考を引用・参考にしながらその変遷をたどってみたい⁽³⁾。

「身近な地域」という文言が使用されるようになったのは、1969（昭和44）年版の学習指導要領になってからで、それまでは「郷土」の文言が使用されていたようである。地理的分野では、1958（昭和33）年版の第1学年に「郷土」という表記が見られ、1969（昭和44）年版で「身近な地域」という表記に改められた。歴史的分野で「身近な地域」という文言が使用されるのは、1977（昭和52）年版からで、それまでは「郷土」の文言が使用されていた。

まず「郷土」の地域的範囲については、昭和33年版で「郷土の地域的範囲については、生徒の生活に最も密接な関係のある範囲を中心とするのが適当であるが、指導する事項のねらいによってはその範囲に広狭があり、行政区画と一致する場合もあり一致しない場合

もある」としている。また、「郷土」が「地域」と改められた理由として、『郷土』という先祖代々受け継がれてきた土地、自分が生まれ育った土地（ふるさと）、田舎というイメージをもつが、社会変動の激しい現代において自分が住んでいる土地をもはや『郷土』と言える人が少なくなってきた」とことと、「目的が五年中心の『郷土学習』に方法概念が導入され、地域社会を科学的にとらえようとするとき、歴史的・心情的意味を内包する『郷土』より『地域』及び『地域学習』という用語を使用したほうが学習の性格を明確にする」との二点があげられている。

学習指導要領での内容は、昭和22年から26年、30年、33年、44年、52年、平成元年、10年、20年と改訂されてきている。中学校社会科における「地域学習」の内容の変遷の概略をたどってみる。

昭和22年版では、様々な身近な地域（郷土）における第7学年＝中学校第1学年から第9学年＝中学校第3学年の「学習活動例」が記載され、かなり細かな例示が見られる。歴史的な内容の「わが国のいなかの生産生活は、どのように営まれているのであろうか」では、第七学年の先人の業績や郷土の村や町の歴史について調べる具体例や、「わが国の都市は、どのように発達して来たか。また、現在の都市生活には、どんな問題があるか」として、その学習活動例として、郷土の都市の発展の歴史について調べたり、両親や老人に聞いたりする活動をあげている。第8学年の「天然資源を最も有効に利用するには、どうすればよいか」では、先史人類や彼らが利用した資源、貝塚などの調査活動を具体的にあげている。また、「近代工業は、どのように発展し、社会の状態や活動に、どんな影響を与えて来たか」では、「郷土で行われている諸工業について。できれば、各工業の発達の歴史を調べる」具体例が示されている。次に、「交通機関の発達は、われわれをどのように結びつけて来たか」の学習活動例では、郷土の資源・産業・交通の歴史について調べたり、討議したりする活動があげられ、第九学年（中学校第三学年）では、「われわれは、過去の文化遺産を、どのように、うけついで来ているのであろうか。」の単元においては、郷土の文化・地名・伝承について調査する学習活動例をあげている。また、「われわれの芸術的な欲求を満足させるために、社会はどんな機会を与えているか」では、郷土の芸能・工芸・政治などについて調べたり聞き取りを行ったりする、地域に関する様々な活動をあげ、「自分の郷土には、どんな工芸品が生産されているか、その歴史について調べてみる。学校にそれを報告し、一つ一つの工芸品について、将来性があるかどうか、討議する」「自分の郷土では、盆踊りはどんな程度に行われているか、どんな歌詞がうたわれているか、どんな歴史を持っているか、などについて調べてみる」のほか、「われわれの政治は、どのように行われているのであろうか」では、「郷土の古老で、明治維新のことをくわしく知っている人があれば、これを訪問して話を聞く」という活動例が設置されている。

昭和26年版では、第2学年の主題「近代産業時代の生活」第1単元「都市や村の生活は、どのように変ってきたか」の要旨で「第2学年においては『近代産業時代の生活』の主題によって、われわれの生活が、いかに近代産業の発達によって変ってきたかを学ばせようとする。この変化のありさまを生徒に学習させるには、近代産業の発達を最初に取り上げるよりは、まず村や町の生活の変化の具体的な学習を行った後に、その背後に横たわる近代産業の発達の歴史のおよび地理的学習に移ったほうが効果が上がるであろうとの考えから、この単元が最初におかれたわけである」とあり、郷土の具体的な学習を行った後に背景となった大きな近代産業の発達の歴史・地理の学習を行うことが効果的であると明示された。

また、この昭和26年版では、一般社会科とは別に日本史が課されてもよいことになり、「Ⅱ 中学校 日本史の単元（C）案の展開例の第2単元『奈良や京都のような都は、どのような世の中でつくられたか』の『例』で、「博物館へ行ったり、地方の郷土史料館や収集家を尋ねたり、また写真を集めて、古墳時代の人々の風俗や生活を考えてみよう」「縄文式文化から古墳時代に至る郷土の採集品を集め、これに各自でそれぞれ説明書を付して、展覧会を開こう」「近くに国分寺の跡があったら調査し、そこの僧侶や先生から話を聞こう」と原始から古代にかけての歴史的事項について、博物館や郷土資料館などの利用や収集家の訪問、僧侶や教師などからの聞き取りなどの活動、実物を集めての展覧会の開催などきわめて興味深い活動例が示されている。

中世から近世にかけての歴史的事項についての「各地に城が建てられたころの世の中は、どのようなであったか。」の「例」では、「自分たちの郷土には、どんな武士が起ったかを調べてみよう」「この地方で、市のたつ日を調べ、それがいつごろ、どうして起ったか研究発表しよう」「郷土の仏教の宗派には、現在どんなものがあるか、最も多いのはどれかを調べてみよう。それがいつごろ、どのような経路で郷土にはいつてきたかを調べてみるのもよい」「郷土の近くの百姓一揆について、その原因・年代・方法・結果を研究して発表しよう」「郷土附近の旧街道を調査して、関所・本陣・問屋などの遺跡を調べてみよう」「旧家に検地帳があったら見せてもらおう」「水車が近くにあったら、土地の老人から古いころの話を聞こう。また、酒屋や糸車のことも聞いて、そのころの産業の様子を調べてみよう」「郷土に藩の学校や寺小屋があったら、これを調べる。昔の人はどんな学校で、どんな勉強をしていたかを、今と比較してこれを批評してみよう」として、調べ活動の例が示されている。

近代に入っては「新聞やラジオの作られた世の中は、どのようなものであったか。」では、「地方の老人や物知りの人から、次のことを聞き出し、あとで書物などで調べて、発表会を開こう」として、「幕府の終りころの、地方の金持ちの生活」「百姓一揆や打ちこわしの

事件や農民の生活」「身分の低い武士の生活」「水車・酒屋・織物屋・瀬戸物工場などの話」が「例」として示されるとともに、「老人に次のことを聞いて、皆に発表しよう」では、「牛肉やバター・チーズなどを食べだしたころ」「洋服・くつ・こうもりがさが使われだしたころ」「近くの西洋建築はいつごろ建てられたか」「明治初年の神社・寺院・教会の様子」「学校ができたころの様子」「ちゃんまげがなくなった時の話」「車がはじめて走ったころの様子」「燈火のうつりかわり」というテーマが示された。また、「郷土の古い代議士のことや、昔の選挙の様子を、老人に聞いて、今と比べてみよう」「老人に次のことを聞いて、報告しよう」として、「日清・日露戦争のころの様子」「日本が外国と対等につきあえるようになった時の様子」が示された。

その他、「祖父母に、明治のころの教育がどのように行われたか聞いてみよう」「老人から、はじめて映画がはいってきた時の様子や感想を聞いてみよう」「蓄音機がはじめてはいったころの様子も父母から聞こう」「第1次世界大戦に従軍した人や、そのころの人たちから、当時の様子を聞いてみよう。」「父や祖父から、政友会のことや、原敬のことなどについて話を聞こう」と近代の歴史的事項についての聞き取り活動の例が示されている。このように初期社会科とよばれる昭和22年、26年版では、郷土の歴史に関する学習について、実に具体的で多様な活動例が示されている。

昭和30年版では社会科のみの改訂であり、「試案」の文言が学習指導要領から消えている。学習活動の例についても示されなくなった。郷土の歴史については、「2. 歴史的分野 (2) 内容」の「1. 人類文化の始原時代」で、「このころの郷土はどんな様子だったか、また、このころと現代の生活や考え方との比較についても学習させる」「2. 日本国家の成立時代」と「3. 武士が社会に現れた時代」では、「また、このころの郷土はどんな様子であったか、また、このころと現代の生活との比較や、今日への影響についても学習させる」「4. ヨーロッパ人が東洋に進出し始めたころの日本の封建社会の完成時代」と「5. 世界の諸国との国交に基く近代日本の成立時代」では、「また、このころの郷土はどんな様子であったか、このころと現代の生活との比較と今日への影響についても学習させる」とあり、各時代において大きな時代的なまとまりの中で「このころの郷土はどんな様子だったか」ということが学習内容となっている。

昭和33年版の3「指導上の留意事項」には、(5)「イ 郷土の発展の跡を実地調査させたり、遺跡、遺物を見学させることによって、わが国の歴史の発展を具体的にはあくさせ、郷土との関連についても理解させるように努める」とあり、郷土の実地調査や見学がいわれているが、郷土の歴史に関して言及している部分はこの部分のみとなっている。

昭和44年版の3「内容の取り扱い」の(5)「ウ 郷土の史跡その他の遺跡や遺物を見学させて、わが国の歴史の発展を具体的に知らせ、郷土とわが国の歴史の発展との関連を考

えさせるとともに、文化遺産を愛護し尊重する態度を育てるようにすること」「エ 地理的事象にも関心をもたせ、可能な範囲で歴史的事象がみられた地域の風土もしくは環境に触れて、空間的なものへの関心を高めること。また、地域によって制約はあるが、歴史像を浮かび上がらせるため、たとえば、都市や集落、道路、地割、城跡などの地域の歴史的景観を把握させること。なおその際、現在までの変化に気づかせるようにすること」「オ

人物の指導については、郷土の人物を含めて二、三の人物を重点的に取り上げ、適切な時間を設けて指導すること。その際、取り上げた人物の持っていた意図や願い、判断と行為および努力や苦心を、時代的背景の中で理解させ、人物と時代的背景との関連を考えさせるようにすること。なお、史実と俗説との混同を避けるようにすること」とあり、人物の指導について郷土の人物を含めた二、三の人物を取り上げることがいわれている。

昭和52年版の3「内容の取扱い」では「(3) 郷土の史跡その他の文化財を見学・調査させて、我が国の歴史の発展を具体的に把握させるとともに、特に内容の(5)、(6)、(7)及び(8)の取扱いにおいては、地理的分野との関連を図り、かつ民俗学の成果を活用するなどして、郷土の生活文化に触れさせることが望ましい。」「(5) 内容の全般にわたる学習を通して、生徒の歴史上の人物に対する興味や関心をできるだけ生かした指導に努めるとともに、特に郷土の人物を含めて二、三の人物を重点的に取り上げ、これを中心にして学習を展開するなどの工夫も必要である」として、ここでは(3)で新たに地理的分野との関連を図ること、民俗学の成果を活用することがいわれるようになった。

昭和62年12月24日に出された教育課程審議会答申の中学校社会の改善の具体的事項において、「歴史的分野については、我が国の歴史を、世界の歴史を背景に学習させるという趣旨が一層生かされるよう内容を構成する。その際、身近な地域の学習を充実するとともに、日本人の生活や生活に根ざした文化の展開を、政治や社会の動きなどと関連付けて学習できるようにする。また、歴史上の人物の果たした役割や生き方などについて、時代的背景などと関連付けて学習させるよう配慮する」と示されており、「身近な地域の歴史」の学習の充実が図られるようになった。その趣旨にしたがって、平成元年版の歴史的分野「1「目標」の(2)」では、「歴史における各時代の特色と移り変わりを、身近な地域の歴史や地理的条件にも関心をもたせながら理解させるとともに、各時代が今日の社会生活に及ぼしている影響を考えさせる」と「身近な地域の歴史」の学習が初めて目標に位置づけられるようになり、各時代の歴史の特色と移り変わりを「身近な地域の歴史」に関心をもたせながら理解させるということが目標として設定されるようになったのである。また、3「内容の取扱い」の(1)」では、「イ 国家・社会及び文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物に対する生徒の興味や関心を育てる指導に努めるとともに、それぞれの人物が果たした役割や生き方などについて時代的背景と関連付けて考察させるように

すること。その際、身近な地域の歴史上の人物を取り上げることにも留意すること」「ウ

日本人の生活や生活に根ざした文化については、各時代の政治や社会の動き及び各地域の地理的条件、身近な地域の歴史とも関連付けて指導するとともに、民俗学などの成果の活用や博物館、郷土資料館などの文化財の見学・調査を通して、生活文化の展開を具体的に学ぶことができるようにすること」と人物学習の中で身近な地域の歴史上の人物を取り上げることにも留意することが言及されている。そして前回の改訂で加えられた民俗学などの研究成果の活用に加えて、博物館、郷土資料館などの活用がいはれるようになった。

平成10年7月29日に出された教育課程審議会答申の中学校社会の改善の具体的事項において、「歴史的分野については、事項を精選して重点化を図り、例えば、古代、中世、近世、近現代のように時代区分を大きくとって内容を再構成し、わが国の歴史の大きな流れを世界の歴史を背景に理解するようにするとともに、歴史についての学び方や調べ方を身に付け、多面的な見方ができるようにする。また、先人が築いてきた文化と伝統を尊重する態度を養い、我が国の歴史に対する理解と愛情を深めるようにする」ことが示された。この学び方を学ぶ学習の充実を図るという観点から「身近な地域の歴史」を取り上げ、それを調べる活動を通じて、歴史的な事象の追究方法を学ぶ項目が新設された。

平成10年版の「目標」の(4)には、「身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味や関心を高め、様々な資料を活用して歴史的な事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる」とある。「身近な地域の歴史」の学習を通して歴史に対する興味や関心を高めることが目標の一つとなっている。2「内容」では(1)「歴史の流れと地域の歴史」と「地域の歴史」という文言が、初めて内容の項目中に表記された。そして「内容」のイでは、「身近な地域の歴史を調べる活動を通して、地域への関心を高め、地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解させるとともに、歴史の学び方を身に付けさせる」として「身近な地域の歴史」を調べる活動を通じて歴史の学び方を身に付けることがねらいとなった。3「内容の取り扱い」では「エ 国家・社会及び文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物に対する生徒の興味・関心を育てる指導に努めるとともに、それぞれの人物が果たした役割や生き方などについて時代的背景と関連付けて考察させるようにすること。その際、身近な地域の歴史上の人物を取り上げることにも留意すること」「オ 日本人の生活や生活に根ざした文化については、各時代の政治や社会の動き及び各地域の地理的条件、身近な地域の歴史とも関連付けて指導するとともに、民俗学などの成果の活用や博物館、郷土資料館などの見学・調査を通じて、生活文化の展開を具体的に学ぶことができるようにすること」と身近な地域の歴史上の人物と取り上げることや、民俗学などの成果や博物館、郷土資料館などの活用について言及されている。

また、(2) 内容の (1) については、次のとおり取り扱うものとする、として「イについては、内容の (2) 以下とかかわらせて計画的に実施し、地域の特性に応じた時代を取り上げるようにするとともに、人々の生活や生活に根ざした文化に着目した取扱いを工夫すること。その際、博物館、郷土資料館などの活用も考慮すること。」と人々の生活や生活に根ざした文化に着目させることにあたって博物館や郷土資料館の活用が言及されている。

2. 教育基本法の改正と今次の学習指導要領改訂

平成18年12月22日に公布・施行された新しい教育基本法の第二条の五項には「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」とある。この教育基本法の改正を踏まえて平成20年1月17日に出された中央教育審議会答申の「7. 教育内容に関する主な改善事項」の「3) 伝統や文化に関する教育の充実」では、「国際社会で活躍する日本人の育成を図る上で、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育を充実することが必要である。世界に貢献するものとして自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けてこそ、グローバル化社会の中で、自分とは異なる文化や歴史に敬意を払い、これらに立脚する人々と共存することができる。また、伝統や文化についての深理解は、他者や社会との関係だけではなく、自己と対話しながら自分を深めていく上でも極めて重要である。」と伝統や文化についての深い理解の重要性が述べられている。

この伝統や文化に関する教育の充実についての社会科に関する記述としては、「我が国の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度は、我が国や郷土の発展に尽くした先人の働きや、伝統的な行事、芸能、文化遺産について調べるなど、社会科、とりわけ歴史に関する学習の中ではぐくまれるものであり、その充実を図ることが望まれる。具体的には、例えば、小学校においては、縄文時代の人々のくらしや、我が国の代表的な文化遺産を取り上げたりすることがえられる。また、中学校においては、地理的分野、歴史的分野、公民的分野のそれぞれの特質に応じて、様々な伝統や文化に関する学習を重視した改善を図ることが重要である」とされている。

具体的には、②社会、地理歴史、公民の(ii)改善の具体的事項で、「歴史的分野については、我が国の歴史の大きな流れを理解させ、歴史について考察する力や説明する力を育てるため、各時代の特色や時代の転換にかかわる基本的な内容の定着を図り、課題追究的な学習を重視して改善を図る。その際、現代社会についての理解が深まるよう、近現代

の学習を一層重視する。また、例えば身近な地域の歴史学習などの中で、様々な伝統や文化について学習させるとともに、我が国の歴史の背景にある世界の歴史の扱いを充実させる。さらに諸事情の意味や意義、事象間や地域間の関連などを追究して深く理解し自分の言葉で表現する学習を重視する。」として、様々な伝統や文化についての学習の場として身近な地域の歴史学習が考えられている。

この答申を受けて今次（平成29年告示）の改訂において、平成20年3月28日告示された学習指導要領での「身近な地域の歴史」にかかわる項目としては、以下のようなものがある。なお、今次の改訂においては、『身近な地域』とは、生徒の居住地域や学校の所在地域を中心に、生徒による『調べる活動』が可能な、生徒にとって身近に感じることが出来る範囲であるが、それぞれの地域の歴史的な特性に応じて、より広い範囲を含む場合もある」とやはり可変的なものとされている。

まず、歴史的分野の「目標」の(2)に「国家・社会及び文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を、その時代や地域との関連において理解させ、尊重する態度を育てる」とあり、また、「目標」(4)では、「身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味・関心を高め、様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる」と述べられている。これらは平成10年度版の「目標」(2)・(4)と同文である。

『身近な地域の歴史や具体的な事象の学習』については、これらを取り上げることでその時代の様子を実感させ、生徒の歴史に対する興味・関心を高めることが求められる」として、興味・関心を高めていくために時代の様子を実感させ、学習内容が具体的に近くなる身近な地域の歴史がとりあげられる。

「内容」では平成10年版の(1)「歴史の流れと地域の歴史」が「歴史のとらえ方」と変更されている。イには、「身近な地域の歴史を調べる活動を通して、地域への関心を高め、地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解させるとともに、受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め、歴史の学び方を身に付けさせる」と身近な地域の歴史の学習について言及されている。伝統や文化重視の視点から「受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め」という文言が加えられている。身近な地域を取り上げることで地域への関心を高め、地域という具体性のあるものから歴史を理解させようとする。

「内容の取扱い」では、(2)「イについては、内容の(2)以下とかかわらせて計画的に実施し、地域の特性に応じた時代を取り上げるようにするとともに、人々の生活や生活に根ざした伝統や文化に着目した取扱いを工夫すること。その際、博物館、郷土資料館などの施設の活用や地域の人々の協力も考慮すること。」とされている。それまでの博物館、郷土資料館の活用に加えて「地域の人々の協力も考慮すること」と地域の人材の活用につい

ても言及されるようになった。

この「身近な地域の歴史を調べる活動」のねらいは、「地域への関心を高め、地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解させるとともに、受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め、歴史の学び方を身に付けさせることである。」と述べられている。

また、学習にあたっては、「生徒による『調べる活動』となるようにし、『人々の生活や生活に根ざした伝統や文化に着目した取扱いを工夫する』(内容の取扱い)とともに、身近な地域にける具体的な歴史的事象からその時代の様子を考えさせるなどして、『受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め、歴史の学び方を身に付けさせる』ようにする。その際、「民俗学や考古学などの成果」(「内容の取扱い」(1)カ)を生かし、『博物館、郷土資料館などの施設の活用や地域の人々の協力も考慮する』(内容の取扱い)ようにする。」⁷⁾と説明されている。地域を素材として我が国の歴史を理解させ、これまでの学問の研究成果や博物館・郷土資料館などの具体的資料や地域の人々の協力を活用しながら歴史の学び方を身に付けさせるという活動が想定されているのである。そこまでは従前のものと変わりはないが、今回、伝統や文化重視の観点から「受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め」の文言が加えられるようになったのである。

以上、福井氏が述べているように、「身近な地域の歴史」の学習について学習指導要領の変遷をたどってみると、「地域」という素材は変わらないが、そこから、それで何を学ぶかという点では大きな変化があったといえる。地域の課題をさまざまな具体的な身近な地域の歴史の事例から考えさせようとしていた昭和22年、26年のいわゆる初期社会科から、昭和30年、33年、44年、52年の学習指導要領では我が国の発展を地域の歴史と関連付け具体的に把握させるための地域の歴史の学習と位置づけは変化してきた。平成元年、10年には「身近な地域の歴史」の取り上げられ方は大きく変わり、その学習の充実が図られるようになった。我が国の歴史を理解させるとともに、調べる活動を通じて歴史の学び方を身に付けるという歴史の追究のための素材として「身近な地域の歴史」は位置づけられるようになったのである。そして今次の改訂では、伝統や文化重視の観点から「受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め」いう文言が加えられるようになったのである。以上福井氏の論考の大半を転記・引用させていただいた⁽⁴⁾。

3. 地域を知ること

学校は地域の中に存在している。これは当然のことであるが、創立以来歴史のある学校では地域の住民は数世代にわたってその学校の卒業生であったり、地域の運動によって学校が創設されたりするケースもある。かつては、「学校は学校」、「地域は地域」という疎

遠な関係が見られるところもあったが、近年は学校と地域の積極的な連携が強調され、地域の教育力を学校に生かすことが当たり前に行われるようになった。

小学校では、生活科や社会科で「まち探検」などの取り組みが積極的に行われ、地域においても子供会などの活動で地域とのかかわりが深く、地域の人々や保護者も学校に関わることが多かったが、中学生になると部活動への参加などで、中学生が地域にかかわることが少なくなり、また中学校の教職員も学区以外からの通勤者が多く積極的に地域の活動に参加しようとする意識が希薄になる傾向があったといえる。

中学校では様々な生徒指導上の課題を多く抱えるにつれ、学校だけの力で教育を行うことには限界があり、地域や保護者を巻き込んだ学校経営が行われるようになってきている。生徒を地域行事に積極的に参加させたり、職場体験で地域の事業所に協力を頼んだりすることが当たり前になっているし、また、地域人材の協力の下、生徒の学習支援を放課後に行うなどの取り組みも行われている。これまで、学校運営協議会や学校支援地域本部の設立が求められ、地域や保護者が学校運営に参画するようになり、新学習指導要領においても、地域とともに教育課程を編成するなどして学校運営を行うことが求められている。地域の子どもを小学校と連携してどのように育てていくか、地域・保護者の願いを受けて、学校としてどのような生徒を育成していくのかがより一層問われるようになってきているといえる。その意味でも学校の教師として、学校のある地域がどのような地域であるかをその実状を知っていくことが求められている。

そのような状況の中で、社会科を受け持つ教師はどのような役割を果たしていったらよいのだろうか。新しく学校に赴任した社会科教師は、まず地域について知ることが必要であろう。地理的に学区がどのような地形にあり、どのような経済的な特性を持っているか、また歴史的にどのような歴史があるのか、さまざまな意味で地域の実状について理解し知悉しておく必要があるだろう。

では、教師や生徒が、地域の歴史を調べる活動を行うに当たって、筆者が勤務した学校の地域や居住する地域について手掛かりとなるポイントをいくつかの具体例として提示してみたい。

(1) 地域の古道を通して地域の歴史を学習する。

神奈川県には、江戸時代の五街道の一つである東海道が通っているが、それ以外にも中原街道、大山街道などが見られる。東海道の脇街道として利用された中原街道や、丹沢・大山の参詣のために利用された大山街道（大山道、矢倉沢往還）は地域の住民によく知られている。また、鎌倉時代の鎌倉街道は、古くからあるため、住宅地の造成などで寸断されているものでもその痕跡は残されている。

鎌倉街道は「かまくらみち」とも呼ばれ、全国各地から鎌倉に向かう道として整備され

た道であるが、関東地域では「上つ道」「中つ道」「下つ道」に大きく分かれる。そのほか各地に脇道や枝道があり、記録に残されていることも多い。鎌倉時代の「かまくらみち」はその後も鎌倉街道として多くの人々に利用されてきた。近代になり旧道から新しく道が造り直されているのは他の街道も同じであるが、古道である旧道をたどってみると、当然ながら歴史的な発見をすることが多い。舗装もされず昔のたたずまいをそのまま伝える道筋があったり、古い寺院や神社があったり、道祖神や馬頭観音、庚申塔などを見ることができる。もし、学区内にそういった古道があるならば、古道をたどることで地域の歴史に触れることができるだろう。

旧東海道の保土ケ谷宿の途中に、「保土ケ谷・金沢横町道標」があり鎌倉街道が分岐する。この道は「かまくらみち」の「下つ道」に当たるもので、江戸時代には江戸の多くの町人たちが、金沢八景、鎌倉、そして江の島を目指して歩いたといわれる。

保土ケ谷宿から道標を左に折れ、福聚寺の前の急坂を登りきると、「北向観音」という祠がある。そこを右に行く道が弘明寺に参詣するための「弘明寺道」である。弘明寺からさらに先に行く道が「かまくらみち」の脇道で「餅井坂」を過ぎて上永谷駅のそばに北条政子が馬を洗ったという「馬洗い橋」に出る。その先は野庭、小山台、本郷台を経て笠間で「かまくらみち」の「中つ道」に合流する。「かまくらみち」の「下つ道」は「北向観音」を直進するが首都高速道路で道は寸断され、蒔田から現在の鎌倉街道（国道16号線）に合流し、南警察署付近から左の旧道をたどると、上大岡駅を經由して関の下の交差点を左折し笹下釜利谷道路にそって洋光台、能見台、金沢文庫を目指すことになる。金沢文庫から金沢八景、六浦を通り、有名な朝比奈切通しを経て鎌倉に入るのであるが、実はこの道が江戸時代の人々に広く利用されていたことはあまり知られていない。

なぜ江戸時代に多くの人々がこの道を歩いたのだろうか。その目的は物見遊山であった。江戸の町人たちは豊かな経済力を背景に多くの旅を楽しんだといわれる。遠くは伊勢神宮や日光東照宮への参詣、近くは富士山や大山への参詣が知られているが、金沢や鎌倉、江ノ島も気軽に行ける観光地で、金沢は景勝地として知られ、能見堂から見る景色は金沢八景として江戸城の襖絵にも描かれるほど知られており、また、現在のように冷蔵技術のない江戸時代にあって珍しく刺身などの活魚を味わえる場所でもあったという。また、この地域はのちに伊藤博文などが別荘地として選んだ場所でもあった。六浦は侍従川の干潟を利用して製塩が盛んに行われ、それは朝比奈切通しを通して鎌倉に運ばれたといわれている。鎌倉では多くの寺社、江の島では弁財天を参詣し、藤沢宿から東海道を江戸に帰るといふ観光のルートがあった⁽⁵⁾。

「かまくら下つ道」は金沢街道（かなざわみち・六浦道）とも呼ばれていた。この道を利用する人々には、金沢八景、鎌倉、江の島という名所の観光だけでなく、そのほかにも

魅力的な旅の目的地があった。一つは杉田の梅林で、江戸時代、杉田の山には広大な梅林が広がり、観梅のため陸路は東海道と金沢街道、海路は江戸、神奈川方面から船に乗ってこの場所に多くの人々が訪れたという⁽⁶⁾。ちなみに京急杉田駅からJR新杉田駅を結ぶ商店街である「プラムロード」は梅林との関連で名付けられたものである。もう一つは円海山護念寺という浄土宗の寺院に向かう「円海山道」という枝道で、上大岡からしばらく歩いて右の洋光台方面への道をたどり、円海山の山麓にあるこの寺を訪れたという。護念寺は「灸」の施術も行う寺で、「峯の灸」と呼ばれ、江戸時代に作られた「強情灸」という落語の舞台になったほど有名で、多くの人々が順番の列を作ったという。近現代に入って現在でも施術は続けられており、近隣の地域からは施術を受けに来たという年配者が多くいる⁽⁷⁾。

古道をたどると、多くの歴史的な名所、旧跡が多く見つかるものである。鎌倉街道（かまくらみちの「下つ道」）を例として取り上げたが、この道の近辺には、中世ではこの沿道に沿って笹下城や蒔田城があり、笹下城は後北条氏の家臣間宮氏（間宮林蔵の祖先と伝わる）が、東京湾を挟んで敵対する安房里見氏への備えの城であったし、蒔田城は忠臣蔵で知られる吉良氏一族関連の陣屋があった。また、江戸時代、六浦には横浜唯一の藩として六浦藩（米倉氏）が置かれ、京急金沢八景駅近くに六浦陣屋跡がある。

このように古道をたどることで地域の歴史について新たな発見をする機会があるのではないだろうか。

地域の古道を見つける方法として、「時系列地形図閲覧ソフト 今昔マップ3」（埼玉大学教育学部 社会講座 人文地理学 谷謙二研究室）を利用するのが有効である。古地図と現在の地図が画面の左右に表示され対比ができるようになっており、容易に年代ごとの古道を確認することが可能である⁽⁸⁾。

（2）地名を手掛かりに地域の歴史を調べる

地名にはその地域の成り立ちを表す意味が込められているのは周知のことであるが、横浜市には新しく開発された地域では、かつての地名の多くが変更され、青葉区の場合「美しが丘」「あざみ野」「すすき野」「青葉台」「あかね台」などの名称が新たに付けられた例が数多く見られる。磯子区の「洋光台」「汐見台」、港南区の「港南台」、栄区の「本郷台」「桂台」なども新たに名付けられた名称である。新たな地域名（町名）にはそれなりの理由があるのであるが、その地域の特徴を示すわけではないだろう。

磯子区の「洋光台」の以前の地名は「矢部野」で、この「矢部野」の名前は、わずかに半地下になっているJR洋光台駅の上に架かる陸橋にその名前が残るのみである。「野」という文字があることから、この地域がある程度広い野原であったのだろうということが想像できる。青葉区の「すすき野」も広大なすすき野原があったことから新しく名付けられ

たといわれ⁽⁹⁾、磯子区の「洋光台」も開発を行った造成業者が東の東京湾から朝の太陽の光が上ることから名付けたとされている⁽¹⁰⁾。高度成長期に人口が急増し開発が進んだ地域では、その地域のイメージを高めるために様々に洒落た地名が多く地域で生まれた。その功罪はともかくとしても、新しく名付けられた地名は古くから伝わる地名のもつイメージを覆い隠し、その地域のかつての姿を思い描きにくくしたといえる。地域の歴史を知るうえで、生徒の生活する地域やその周辺地域の地名が、なぜそういう名称なのかを調べることは大きいといえるのではないだろうか。手掛かりになる地名の「原」「野」「山」「川」「谷」「沢」「浦」「田」など、地名として使用される文字を通してその地域名との関連を想像させたいものである。

栄区には「公田」（くでん）という町名があるが、これは以前からの公田村の名前がそのまま現在の地名になっているものである。横浜市栄区のホームページの「栄区の町名とその由来」では、次のように説明されている。

「昭和14年の横浜市編入の際、鎌倉郡本郷村大字公田から新設された町です。昭和61年11月3日の行政区再編成に伴い、(旧)戸塚区から編入されました。古くは鎌倉郡公田村といい、明治22年の市町村制施行の際、中野村、鍛冶ヶ谷村、上野村、桂村、小菅ヶ谷村、笠間村と合併して本郷村大字公田となりました。町名は旧村名を採りました。公田とは「公田（こうでん）」というわが国古代の班田法で、位田（いでん）・職田（しきでん）・口分田（くぶんでん）などとして与えた残りの田のことであり、正方形の耕地を縦横三列ずつに九等分した、その中央に位置した公有の田をいいます。周囲の私田を耕すものが共同で公田を耕し、その収穫を租税としました。町内から縄文時代の「人面把手（とつて）」が発掘されています。鎌倉時代には国衙（が）領（平安後期以後、国司の統治下にある土地、国領）の田をいったといいます。北側をいたち川が流れ、北西側を鎌倉街道が通っています。町内に横浜市栄図書館があります。」⁽¹¹⁾

このように「公田」という地名が、古代の班田法に関わる名称であることを知ることは意義のあることであり、生徒の町名についての認識を新たにするきっかけになるのではないだろうか。現在多くの行政区では、ホームページ等で各地域の町名の由来や歴史などが紹介されており、ぜひ生徒に活用を進めるべきだと考える。

(3) 地域の寺院や神社を通して地域の歴史を調べる

横浜市栄区にも多くの寺社が存在するが、当然ではあるが、古い歴史を持つ寺社は古道沿いに立地していることが多い。栄区の寺社の中で創建が比較的古い歴史のある寺社に、證菩提寺（しょうぼだいじ）、長慶寺（ちょうけいじ）、長光寺（ちょうこうじ）がある。

證菩提寺については、栄区のホームページの「栄区の歴史」に次のように説明されている。

「治承4年、石橋山で戦死した佐那田与一の霊を弔うために、源頼朝が創建したと伝えられる古寺です。かつては広大な敷地をもっていたこの寺の建立理由は、鎌倉の一大穀倉地帯であり、しかも鬼門にあたる「山内本郷」を守るためといわれています。鎌倉三道の交通の要衝を固めつつ一大軍事基地として、武器の生産のための職人や工人を集めたことは、公田町の「番地」、元大橋の「番匠面」、鍛冶ヶ谷などの地名から推測されるところです。源氏の衰退とともに荒廃しましたが、その後は北条泰時の娘、小菅ヶ谷殿によって嘉禎元年（1235年）に今のフローラ桂台あたりに再建された新阿弥陀堂が中心となっています。平安期の定朝流による阿弥陀三尊像は、国の重要文化財に指定されており、初期の本尊と伝えられる阿弥陀如来像も鎌倉期運慶流の作で県の重要文化財となっています。また、成巻文書11通が横浜市指定文化財となっています。」⁽¹²⁾

長慶寺については、同ホームページには、「もとは天台、真言二宗をかねる密教道場で、大船の玉縄にあったといわれています。鎌倉時代に浄土真宗に変わり、戦国時代には石山本願寺の合戦で織田信長と戦った実好普古（じっそうふこ）が住職のとき、現在の中野町に移り草庵を設けたと伝えられています。その後、徳川家康が鷹狩の帰りその草庵に立ち寄って水を所望したところ、普古は家康とは気づかずに粗末な茶碗に、通称水ノ口山（ふじやま）の良水を差し出すと、家康が感謝し本堂再建の費用を寄付したと伝えられています。家康からの拝領と伝わる茶碗が残されています。」とあり、この寺と徳川家康との関連が説明されている⁽¹³⁾。

長光寺についても、同ホームページには、「東照山医王院と号しかつては天台宗の寺で伊豆の豪族、伊東祐親の孫、祐光の創建と伝えられています。その後、親鸞聖人の時代に現在の浄土真宗に改宗し、浄土真宗本願寺派に属しています。寺号は本願寺三世覚如上人から頂きました。本尊は阿弥陀如来ですが、祐光が伊豆からもってきたという「花立薬師」と呼ばれる約20センチメートルの木彫の薬師如来像も現存しています。ほかに古文書や伝親鸞作聖徳太子像、樹齢500年というくろがねもちの『なんじゃもんじゃ』の木があります。」⁽¹⁴⁾とあり、ここでは触れられていないが、「栄区郷土史ハンドブック」には、長光寺にある「花立薬師」の由来について、「江戸の初めごろ、将軍徳川家康は、本郷のあたりでよく鷹狩りをしました。あるとき、大切にしていた鷹が一羽逃げてしまいました。家康も家来の者もあわてて後を追いましたが、鷹は小菅ヶ谷の森の松のこずえにとまって、なかなかおりてきてくれません。困った家康がふとあたりを見まわすと、松のかたわらに薬師如来がまつられている小さなお堂がありました。『どうぞ、鷹がおりてきますように』と家康が熱心にお祈りすると、ずっと鷹がまいおり、家康の腕にとまりました。喜んだ家康はお礼にと足もとの野の花を手折って、薬師如来に供えました。それからそのお堂のあたりは「花立」と呼ばれるようになったといわれています。もう一説には、花立とは地域

の境界につける地名で、このあたりが昔、武蔵と相模の国の境にあったためといわれています。」と説明されている⁽¹⁵⁾。

また、長慶寺と長光寺という二つの寺院は、いずれも徳川家康との関連があり興味深い
が、「栄の歴史」にはこの背景についてこのような記述がある。

「徳川家康は、徳川氏による将軍職の継承を明示するため、慶長一〇年に子の秀忠に将
軍職を譲った。その後、駿府（静岡市）に居城を構え、『大御所』と称した。しかし、政
治の実権は依然として『大御所』家康が把握しており、家康はたびたび駿府～江戸の間を
往復した。この際、使用されたルートは東海道や中原街道であり、そのため、東海道の藤
沢や中原街道の中原には、休泊用の御殿が整備されていた。

江戸～駿府間の往来の途中、家康は各地で鷹狩（放鷹）を実施した。鷹狩は、鷹を用い
て鶴・白鳥・鴈・鴨等の鳥類を捕獲する狩猟であり、軍事訓練や民情視察を兼ねて、大名
たちの間で、盛んに行われていた。また、捕獲の対象となる渡り鳥が多いため、稲の刈り
上げが終わった頃から水田に田植えを行うまでの農閑期に実施されている。

栄区域は、東海道の道筋ではないものの、それに近接しており、また金井村玉泉寺に隠
居所を構えた誠拙が詠んだ句に『亀甲山に鶴の一声』の一説があるように、区域の水田に
は相当数の鶴が飛来しており、家康の鷹狩が行われたようである。

『新編相模国風土記稿』によれば、北条氏の浄土真宗弾圧により荒廃していた中野村長
慶寺に、『慶長の初』に徳川家康が鷹狩の際に来訪、『寺内の清泉』から汲んだ飲み水を提
供した。この水が家康の口に合ったようで、その際に寺内が久しく荒れている旨を言上し
たところ、慶長一六年に藤沢御殿に召し出され、寺の再建費用を与えられたという記述が
残されている。なお、現在、同時には家康より拝領したという茶碗が寺宝として伝えられ
ている。

こうした鷹狩とそれを行う鷹場は次第に制度化されていき、江戸周辺の村々は、将軍が
鷹狩を行う御拳場と、幕府の鷹匠が鷹の調教を行う捉飼場とりかいばが設置されていった。この他、
尾張家・紀伊家・水戸家の御三家など、特別に江戸周辺で鷹場を与えられた大名もいた。
ちなみに寛永一五年（一六三八）には、当時大老であった若狭小浜藩主の酒井忠勝へ鎌倉・
三浦・本牧が鷹場として与えられており、区域の村々もこれに含まれていたと考えられ
る。」とあり、区域の村々もこれに含まれていたと考えられる。（加藤叡江、斎藤司）⁽¹⁶⁾

このように、身近な地域に源頼朝が創建した壮大な伽藍を持つ寺があったり、徳川家康
に関係する寺があったりと歴史上の人物との関わりを認識することで、生徒は地域に対す
る愛着を強く抱くのではないだろうか。

（4）地域にある工場や施設を通して地域の歴史を調べる。

地域には様々な工場があったり、かつての戦争で建設された軍事施設の跡があったりす

る。そういった工場や施設の歴史を調べることで地域の歴史を学習することができる。横浜市栄区のJR本郷台駅の周辺地域には、旧第一海軍燃料廠という広大な施設があったことはあまり知られていない。現在はこの場所には、神奈川県立地球市民かながわプラザ（あーすぷらざ）、柏陽高校、本郷中学校、栄区役所、栄共済病院、鎌倉女子大学、警察学校などの施設が点在している。かつて、この地は水田が広がり本郷地域でも最も米のとれる地域であったとされる。

1938（昭和13）年、横須賀の海軍基地（海軍航空廠）への交通の番がよく、約50haの広大な地域を利用し燃料廠が建設されることになった。それまで航空燃料の研究を行っていた徳山海軍燃料廠が栄区小菅ヶ谷に移転し、改組されて第一海軍燃料廠として建設された。大船駅から燃料廠まで物資を運ぶための鉄道の線路も建設され、現在の笠間十字路から警察学校に伸びる直線の道は、かつて燃料廠への貨車を引く小型の蒸気機関車が走っていたといわれる。また、横須賀市追浜の海軍横浜航空隊とここを結ぶ道路（環状4号線原宿六浦線）や海軍厚木航空隊とを結ぶ道路も建設された。この燃料廠は、もともと海軍の軍艦の燃料を研究していたとされ、石油に代わるアルコール燃料や、周辺の山林にある松の根で製造した「松根油」などの航空燃料の研究へと次第に変わっていったようである。正門は現在の栄消防署まへのT字路にあり、東門は柏陽高校の校庭の東側、西門は警察学校横のT字路にあった。現在も本郷台駅近くの山には高射砲の陣地跡や防空壕の跡が残っている。この施設で働く人のためにできた隣接する海軍共済病院は、現在の国家公務員共済組合連合会横浜栄共済病院となった。

また、この燃料廠と横須賀市追浜の海軍横浜航空隊を結ぶ道路は相武隧道（トンネル）を通り、金沢区六浦に至るが、このトンネルも1942（昭和17）年にできたものである。やがてアメリカ軍の空襲が激しさを増したため、トンネル内は安全であるとのことで、それほど広い道幅ではないが片側半分を地下軍需施設として倉庫や航空機製造のための工場として利用されていたといわれている⁽¹⁷⁾。

ただそこに施設があったことを知るだけでなく、戦争の負の側面も知っておく必要があるだろう。「栄の歴史」の「戦時下に生きる人びと」にはこのように記述されている。

「戦時体制が進むのと並行して進んだ、軍事工場・海軍施設の開設は、農民が農地を手放し、代ってこれらの向上に勤めるといふ大きな生活の変化を、この地域にもたらした。また、工場は地域の中で、公害を引き起こす存在でもあった。たとえば、第一海燃料廠では、作業中に発生する有毒ガスや実験中のエンジンの爆音などによる被害を、地域住民は受けていた。

こうして生活の様相が変わりつつある上に、さらに追い打ちをかけたのが、昭和一三年に制定された国家総動員法と、翌年これに基づいて出された国民徴用令であった。昭和

一九年から、第一海軍工廠への学徒動員も始まったという。その他、小学校（当時の国民学校）の生徒は、農繁期の農家に勤労働員された。さらに学校での防空壕掘りなど、当時の学校は授業に専念できる状況ではなかった。

成年の男性の多くは召集され、女性も挺身隊などに動員された。三ツ沢墓地に葬られた戦没者の数を見ると、旧戸塚区は一六五〇人となっている・この内空襲などの一般被災者は、七五人であった。横浜の人びとが多く入隊した部隊は、日中戦争勃発後の中国大陸や、太平洋戦争時の南方など、激戦地に送られた部隊が多く、いずれも大きな犠牲を出したのである。⁽¹⁸⁾

このような事実を知るためには、図書館などの書籍やインターネットだけでなく、これまでの学習指導要領も示すように、戦争を経験した地域のお年寄りの話を聞くことが重要になるだろう。

地域にある商店街について調べることも興味深い。横浜には歴史のある商店街がいくつかあるが、神奈川大学の膝元にある六角橋通商店街は、横浜橋通商店街・洪福寺松原商店街・大口通商店街と並び、戦前から続く市内有数の商店街である。旧綱島街道沿いに白楽駅と六角橋交差点を結ぶ約500mのメインストリートをはじめ、数多くの路地が網の目のように存在する。白楽駅を頂点とするゆるやかな坂道になっているため、白楽駅側を「上」、六角橋交差点側を「下」と呼ぶ地元住民も多い。昭和30年代の建物が多く残っており、しばしばテレビドラマの撮影などに使用される商店街となっている。

商店街のメインストリートである旧綱島街道は、古くから小机―神奈川宿間の街道筋であり、付近の農村から農産物や生糸が横浜方面に運ばれるため、農家相手の商店が多くあった。戦後すぐにバラックが集まる闇市として発展し、現在の商店街の形となっていた。かつては横浜市電六角橋線が横浜上麻生線上を走っており、多くの買い物客で賑っていた。終点は六角橋交差点付近で、現在の六角橋一丁目1番に切符売場があった。六角橋二丁目の通り（横浜銀行の向かい）が車庫となっており、不自然に道幅が変わっているのは当時の車庫の名残である。

六角橋という地名は、町内にある宝秀寺の1695年の記録によると、日本武尊が東方へ赴く際に、この地を治めていた豪族、大伴久応（おおとものきゅうおう）という者の庵に泊った。翌朝、日本武尊が五位木（ごいぎ）という六角の木の箸で食事をし、この箸を久応に贈った。久応はこの箸に「天照大神・日本武尊」と書いて日夜拝んでいた。このことから、村名を「六角箸村」とし、後に「六角橋村」と改めたという。昔、この地に架かっていた橋が六角形の材木で組まれていたので、そこから「六角橋」と名付けられた。という説もあるという⁽¹⁹⁾。

このように、身近な地域にある施設を調べることで、その施設ができた由来や変遷、地

名の由来などに触れることができる。インターネットや図書館を利用して地域の歴史に触れることで機会が多くなれば、生徒の地域に対する興味を高め愛着を強くすることになるだろう。

4. 総合的な学習の時間との関係

次の表は新学習指導要領における総合的な学習の時間の探究課題をまとめたものである⁽²⁰⁾。

言うまでもなく総合的な学習の時間は、教科横断的・総合的な学習を行う領域の学習の取り組みである。

(図表2)

四つの探究課題	探究課題名	探究課題の具体的内容
横断的・総合的な課題 (現代的な諸課題)	・国際理解	地域に暮らす外国人とその人たちが大切にしている文化や価値観
	・情報	情報化の進展とそれに伴う日常生活や消費行動の変化
	・環境	地域の自然環境とそこに起きている環境問題
	・福祉	身の回りの高齢者とその暮らしを支援する仕組みや人々
	・健康	毎日の健康な生活とストレスのある社会
	・資源エネルギー	自分たちの消費生活と資源やエネルギーの問題
	・安全	安心・安全な町づくりへの地域の取組と支援する人々
	・食	食をめぐる問題とそれに関わる地域の農業や生産者
地域や学校の特色に 応じた課題	・科学技術	科学技術の進歩と社会生活の変化
	・町づくり	町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織
	・伝統文化	地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人々
	・地域経済	商店街の再生に向けて努力する人々と地域社会
生徒の興味・関心に基づき 課題	・防災	防災のための安全な町づくりとその取組
	・ものづくり	ものづくりの面白さや工夫と生活の発展
職業や自己の将来に 関する課題	・生命	生命現象の神秘や不思議さと、そのすばらしさ
	・職業	職業の選択と社会への貢献
	・勤労	働くことの意味や働く人の夢や願い

社会科歴史的分野の「地域の歴史を調べる」学習に関連する総合的な学習の時間の内容は、このうち、「地域や学校の特色に応じた課題」になるだろう。

特に歴史的分野における「地域の歴史」に強く関係するものは「伝統文化」であり、具体的内容にあるように「地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人々」に関するものといえる。「地域の伝統や文化」とは具体的にいえば、地域の伝統的な祭礼や芸能、地域に伝わる伝統工芸品や文化財などが当てはまる。

学区には神社があり、夏祭りや秋祭りなどの祭礼が行われることが多い。特に歴史的に長い伝統をもつ神社では毎年規模の大きな祭礼が行われ、地域ごとに現在に受け継がれてきている。そのような祭礼の継承に力を注ぐ地域の人々と交流しながら、その苦労や工夫を地域住民である中学生が学び次の継承者として成長していくことは大切なことである。

筆者が校長を務めていた横浜市内のある六浦中学校は、1947（昭和22）年に創設された新制の中学校で、学区には瀬戸神社という源頼朝が創建した伝わる神社があり、毎年7月の第2日曜日に天王祭という祭礼を行っている。六浦地区の各町内会はそれぞれ神輿をもち、総領守の瀬戸神社の神輿が巡回するというものであった。総合的な学習の時間の取り組みが始まった頃に、当時の校長がこの祭礼に生徒を参加させることを提案し、現在も引き継がれている。生徒は自分の居住する町内会ごとに祭礼に参加する。男子は主に神輿の担ぎ手や山車の牽引、女子は祭礼での食事の準備や物品の販売などを手伝っている。ここ数年近隣の大学の学生も参加するようになっていく。当初は祭礼に参加するのみの活動であったことに疑問を感じ、本来の総合的な学習の時間の内容に近づけるべく様々な工夫を行ってみた。

その一つは、「地域を知る」という取り組みで、祭礼に参加する意義を理解していない生徒や、歴史的に古い地域ではあるものの、他の地域から転居してきた住民も多くおり、地域のことをほとんど知らない生徒も多くいたためである。そんな折、金沢区ない出身であった当時の金沢区長が、「金沢区のことをもっと知ってほしい」との趣旨で、金沢区内の小学校や中学校に出向き「区長の出前授業」を行う取り組みがあり、その意向を受けて筆者の学校も手をあげ、全校生徒が区長の出前特別授業を受講することになった。

授業の内容は、区長が800年前の地形から六浦中学校、区役所、瀬戸神社の位置を生徒に質問し、そのほとんどが海の中であったことを確認、六浦の地域は鎌倉の重要な港であったこと、浮世絵にも描かれた景勝地であったことを写真と照らし合わせながら説明された。また、瀬戸神社の夏祭りの様子や、能舞台の説明もされ、また金沢を愛した歴史上の人物として徳川家康やペリー、伊藤博文などの人物がいたこと。坂本龍馬も六浦から浦賀に通じる「浦賀道」を通っていたこと、明治憲法も金沢で作られたことなどにも触れられた。最後に、最先端技術の集まる金沢の工業団地や、北陸新幹線の新型車両を作っている工場も金沢区にあること、俳優の竹中直人さんやタレントのタモリさんも金沢にゆかりがあり、区役所を訪問していることに生徒たちは驚いていた。まとめとして、「六浦中学校の生徒の皆さんは、地域行事に積極的に参加しているので、さらに地域を知り、地域を愛し、地域の発展のために頑張ってもらいたい」との力強い激励をしていただいた⁽²¹⁾。以下はその出前授業を受けた生徒の感想である。

(図表3)

- ・ 普段あまり知ることができない「自分の住んでいる所」金沢を詳しく知る、いいきっかけになったと思った。また、横浜市の中でいろいろなNo 1があり、金沢に住んでいることが少しうれしくなった。
- ・ 金沢区はどんないいところがあるのか、私は知らなかった。けれど、金沢区は色々なことが横浜市の中で1番だし、有名人や歴史の人物も金沢区が好きだということを知って、金沢区に住んでいることがうれしくなった。
- ・ 区の職員の方が公園を整備してくださっているからこそ、私たちが安全に遊んだり暮らしていることを改めて実感した。次は、私たち一人一人が区に対して何ができるかを考えて、自分たちで実行することができるようにになりたいと思った。とても分かりやすく、そしてクイズなどの見えて面白い工夫もしてあって、時間があっという間に過ぎていた。
- ・ まず、区長さんにはなかなか会えないことだし、長い時間の中でゆっくり話を聞けるということはスゴイことだと思った。忙しい時間を削ってきてくださって『ありがとうございます』。そして、本当に区長さんのお話で前よりもっともっと！金沢区が好きになった。本当に素晴らしい場所です！
- ・ 金沢区役所では地域のために町づくりの支えだけでなく、アプリを考えたりと、区役所の働きや色々なことが知ることができた。有名な歴史上の人物（ペリーや伊藤博文など）が金沢を好んだというのも驚きです！そう思うと金沢ってすごいなと思う。
- ・ 金沢区のことをもっと知りたいし、これだけ頑張っていることが分かったので自分も金沢区をよくしていきたいなと思った。
- ・ 歴史上有名な人物も金沢が好きだったということを聞くと遠い昔の人が一気に身近に感じられた。単純かもしれませんが、金沢は意外にすごかったんだな、と分かれると金沢が誇りに思えてきた。また、瀬戸神社や、称名寺など身近なところが世界になりかけていたり、実はすごいところだったということを知って驚いた。今回の授業で、今まで知らなかった金沢のことがたくさん知れ、今まで金沢のことをあまり知らなかったのだなと分かった。
- ・ 金沢区の自然を守っていかなければいけないと感じた。世界遺産になるかもしれない称名寺や国宝があると同時に自然災害が起こりやすい町だと知り、気をつけようと思った。今日の授業で金沢区が好きになった！

さらに、生徒に地域祭礼に参加する意義を実感させるため、この取り組みを始めた元校長を招請し全校生徒に講話をしてもらう取り組みを行うことにした。元校長は教諭時代にも社会科の教師として長く在勤していたということもあり、六浦中学校や六浦の地域の歴史や魅力、素晴らしさや取り組み詳細に語ってもらうことができた。講話の概要は次の通りであった。

六浦中学校の校歌にある「緑濃き小泉（こずみ）のほとり」「平潟に舞う雁（かりがね）の」という歌詞には、江戸時代歌川広重が描いた「金澤八景」にある「小泉夜雨」「平潟落雁」の地名があり、この地域の美しい風景をうたっていること、歌詞に六浦中学校の名前が一切出てこないのは大変珍しいことであること、六浦中学校のもとあった場所には塩田が造られ、作られた塩は鎌倉はもとより遠くまで運ばれ評判が良かったこと、「三艘」（さんぞう）という地名には、鎌倉時代中国の宋からやってきた船が3隻（せき）も岸についたことから名づけられたといわれるように、六浦は鎌倉幕府には重要な貿易の港だったこと、瀬戸神社の祭礼は六浦地域で一斉に行われる伝統あるお祭りで、最初は生徒会役員の生徒が参加していたのが、生徒からの提案で全校生徒が参加する取組が行われることに

なったこと、そして学校が地域との交流を深めていく上で大きなきっかけとなったことなどを説明していただいた。最後に、六浦中の生徒が、さらに地域との交流を深め、活躍してもらいたいと期待を寄せられた⁽²²⁾。以下に講話を聴いた生徒の感想をいくつか紹介する。

(図表4)

- ・ 区長さんの話で金沢区への親しみがわいたけど、今回は、六浦への親しみ、六中への親しみがわいた。地域祭礼に参加することを地域の人はとても喜んでくださっているから、もっと一生懸命に参加したい。地域の知っている人がいたらもっと積極的に挨拶したい。長い歴史のある六浦、六中をもっと大切にしたい。今回聞いた話をしっかり覚えておきたい。
- ・ 昔、4か月だけでもこの六浦が県だったということが嬉しかったです。「六浦やるじゃん！」と感じました。「お屋敷町」という地名が今でも残っているのは、当時の大名(米倉氏)が庶民の印象に残っていたからかなと思いました。地域祭礼の行事が授業になって良かったと思います。大人のように扱ってくれて一緒にお祭りをするというのが、自分も地域の一員という感じがしてとても嬉しかったです。また、学校がお祭りのお昼ごはんにお弁当を持って行かせたら、地域の人が「それはいけねえ。お祭りはみんなでやるもんだ。私たちが責任をもってお昼ご飯を用意しましょう！」と怒って言うてくれた、と言う話も初めて知り、そんな人たちのいる六浦という地域に生まれ、育ち、住んでいて良かったな、嬉しいなと思いました。・ 今六浦の近くに住んでいることが誇りに思えました。住んでいる所の歴史をもっと深く知りたいと思いました。地域の活動についてもよく知ることができました。
- ・ 学校が昔はここになかったことに対してとても驚きました。六浦が一度県になったという夢のような話に驚き、金沢区に住んでいることに誇りに思いなおしました。これからも金沢に住みつけ、誇りを持って自慢したくなりました。

また、地域と方の話を直接聞く機会を設け、さらに地域住民としての自覚を高める取り組みも行った。学区が3つの連合町内会に分かれているため町内会ごとに会場を分け、その地域の方から地域の歴史や祭礼等について話をしてもらった⁽²³⁾。以下はその時の生徒の感想の一部である。

(図表5)

- ・ 地域のお祭りとかめんどくさいとか、何で参加しないといけないのかなって思ったりしていたけど、話を聞いて、考えが変わって、やってはいけないことに気がついたり、地域の人との関わりを楽しくしようと思った。笑顔で挨拶してもらえとうれしい気持ちになるから、自分も挨拶しようと思う。
- ・ 地域を大切にしようと思いました。一人で悩んだりしないで、友達や家族、地域の人に相談をしていこうと思った。また、行事に積極的に参加して地域の人との交流を深めていけたらいいと思う。地域のためにできることやゴミ拾いなどできるところからやっていきたい。
- ・ この“地域”というくくりだけでも多くの歴史伝説がありとても驚いた。社会の歴史で習ったことに関連することも多く出てきて六浦とか、この町ってすごいんだなと思った。また、自分も街の一員なんだ、ということを感じた。
- ・ 地域の方のお話で地域祭礼は中学生が手伝って、お祭りに参加していて、それが地域の方にとっては元気が出るなどをおっしゃってくださってすごくうれしかった。来年も地域祭礼を頑張ろうと改めて思った。それに中学生が一生懸命やって地域の方が楽しいとか元気が出てくるなど思ってもらえるように、そして、地域がもっと明るく、より良くなるように、これからも頑張りたい。

・社会の歴史で習ったことに関連することも多く出てきて六浦とか、この街ってすごいんだなと思った。また、自分も街の一員なんだってことをしみじみ感じた。

このように、生徒が地域の方から直接話を聞くことで、自分の住む地域について認識を改めたことは大きな意味があったのではないだろうか。三世代にわたって生活している生徒もいる一方で、他の地域から転入してきた家庭の生徒もあり、地域住民としての意識も希薄であることが課題になっている。小学生までは地域の子供会などに参加していたが、中学校に入学して以降は、地域との結びつきが弱くなる傾向がある。地域の祭礼があっても「お客」としての参加にとどまっている場合が多く見られる。学校が生徒をそういった祭礼に参加させることで地域の大人との交流が生まれ、生徒と地域の人が顔見知りになることで日常的に挨拶が交わされ、地域が明るくなっていくことは大切なことであるし、中学生は地域にとっては祭礼の運営上の貴重な頼りになる「戦力」として期待できる一方、生徒によっては中学校を卒業しても祭礼に積極的に参加して地域の担い手に成長していくことができれば地域の活性化につながるという意味でとても重要な取り組みだったといえる。

総合的な学習の時間の取り組みには様々なものがあるが、中学校ではどの学校もおしなべて「職場体験」を実施していることが多い。つまり、総合的な学習の時間における探究課題は「キャリア」ということになる。しかし、残念なことであるが、職場体験が「体験」だけで終わってしまっている学校が多いように思われる。職業インタビューや職業講話などを取り入れて、中学校3年間を見通した取り組みが行われている学校もない訳ではないが、学校の特色としての取り組みにはなりにくいせいも、「便利な時間」として他の学校行事等の準備に充てられてしまい、それが総合的な学習の時間であると認識している教職員が多くいるのはとても残念なことである。総合的な学習の時間の取り組みとして、地域にある学校として、職場体験する事業所や施設、商店街や工場等を調べたり、商店街や工場の方に話を聞いたりするなどの取り組みも可能であろう。社会科では、地理的分野では地理的な側面で、歴史的分野では地域の歴史的な側面を調べたりすることで連携していくことは十分可能である。地域を調べる活動は修学旅行等で訪れる地域の調べ学習にもつながる。生徒が調べたことや体験したことを発表する場を設けることも忘れてはならないだろう。地域の方の話を聞いたり、地域の方や職場体験で世話になった事業所の方を招いて交流したりすることの意義は大きいといえる。

5. 地域の歴史を調べるための環境整備

学習指導要領では、「教育環境の充実のために次のような条件整備が求められる」とした中に、「教科の内容に関係する専門家や関係諸機関等と円滑な連携・協議を図り、社会との関わりを意識して課題を追究したり解決したりする活動を充実させること」「博物館や資料館、図書館などの公共施設についても引き続き積極的に活用すること」「教員を対象とした研修の充実を進めること」があげられている。

「教科の内容に関係する専門家や関係諸機関等と円滑な連携・協議」についていえば、地域の歴史に関する専門家とは、地域の歴史を知る郷土史家や古老になるかもしれない。総合的な学習の時間では、伝統芸能や祭礼を受け継ぐ地域の人々であるだろう。「博物館や資料館、図書館などの公共施設」は言うまでもないが、調べ学習等で積極的に活用することを指導すべきであるし、学校図書館においても職場体験や地域の歴史に関するコーナーを設け、関係する書籍を揃え、生徒が調べやすい環境を整備すべきであろう。また、市町村区役所ではホームページで地域の歴史を紹介しており、子ども向けの書籍も発行されている。インターネットで検索したり書籍を閲覧できたりするように調べやすい環境の整備をしていくべきである。「教員を対象とした研修の充実を進めること」については、地域の歴史について学校内で社会科教師が講師を務め、学区がどのような地域であるかを他の教師に伝えていくための研修の場を設けたり、学区の状況を知るために、生徒指導担当者と連携しながら「学区巡り」を企画するなどの取り組みが考えられる。

6. 地域の歴史を学ぶ意義

新学習指導要領では、「社会参画」が特に強調されている。改訂の趣旨にある「社会科の成果と課題」では、「主体的に社会の形成に参加しようとする態度や、資料から読み取った情報を基にして社会事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分である」ほか「社会科、地理歴史科、公民科では、社会との関わりを意識して課題を追究したり解決したりする活動を充実し、知識や思考力等を基盤として社会の在り方や人間としての生き方について選択・判断する力、自国の動向とグローバルな動向を横断的・相互的に捉えて現代的な諸課題を歴史的に考察する力、持続可能な社会づくりの観点から地球規模の諸課題や地域課題を解決しようとする態度など、国家及び社会の形成者として必要な資質・能力を育んでいくことが求められる」としている⁽²⁴⁾。

地理的分野では、「地域調査に関わる内容構成の見直し」において、「生徒の生活舞台を

主要な対象地域とした、観察や野外調査、文献調査などの実施方法を学ぶ『地域調査の手法』と、地域の将来像を構想する『地域の在り方』の二つの中項目に分け、再構成することとした」とあるように、地理的分野においても単に地域について調べるだけではなく、地域の担い手として「地域の在り方」を考える学習が追加されている⁽²⁵⁾。「地域の在り方」を学習するためには、現在の状況を調べ考察するだけでは十分でないことはいうまでもない。その地域の歴史を知ってこそ、地域の課題が明確になり将来像を構想できるといえるし、その意味で、歴史的分野において地域の歴史を調べる学習活動は重要であると考ええる。

また、身近な地域の歴史を学ぶことは、学習指導要領が示しているように「身近な地域は、歴史上の出来事を具体的な事物や情報を通して理解することができるとともに、それに自らが生活する日常の空間的広がりの中で実感的に捉えることのできる学習の場」であり、「そこで、『比較や関連、時代的な背景や地域的な環境、歴史と私たちとのつながり』などの視点に着目して、歴史を追究する方法そのものを学ぶことができる有効な機会」となるのである⁽²⁶⁾。

生徒が地域を単に学習の対象として調べ学習を行うだけでは、地域への愛着を涵養し地域の担い手として育成していくには十分とは言えない。実際に地域の人と交流し、地域の話の聞いたり、祭礼や地域の運動会や防災訓練などに一緒に参加したりすることでそれが可能になってくるのではないか。そういった意味で、総合的な学習の時間での取り組みとの連携が重要になってくると思われる。

おわりに

社会科において、地域の歴史を学習することの意義はきわめて大きいといってよい。今次学習指導要領で強調される「生きて働く知識」の多くが身近な地域学習の中にあるといえる。源頼朝や徳川家康が自分の住む町と大きくかかわっていたことを知った生徒は、授業で学んだ学習内容を身近に感じることができであろうし、自分の通う学校の敷地が、かつては海であり、塩田であったことに驚く。生徒がいつも歩いている道を、かつて鎌倉武士が「いざ鎌倉」と馬で疾走していたことに思いを馳せるかもしれない。そういった地域についてのとらえ方をする中で、地域への愛着、郷土愛も生まれてくるのだと考える。また、総合的な学習の時間とも連携した取り組みを行うことで、地域の人との交流を図り、関係を深めることで、地域の一員としての自覚が育まれ、やがて地域の担い手として成長していくことが期待される。

社会科の教師は、まず赴任した学校の地域について調べ、理解を深めるとともに豊富な知識を持っておくべきであろう。生徒に調べる方法や調べる手順についてしっかりと学習

させ、実際に調べ学習をさせたとしても、教師はあらかじめ生徒が地域について調べようとする内容や生徒が獲得する知識をある程度持っているべきである。具体的には、様々な方法で地域の情報や知識を得ておくこと、他の社会科教師とともに実際に学区やその周辺の地域を歩いたりすることも重要であろう。学校の中で社会科の教師は、学校内で誰よりも地域についての知識に精通する存在でありたいものである。

[注]

- (1) 中学校学習指導要領（平成20年告示）解説社会編 平成27年9月〔歴史的分野〕1 目標 (4) p.68, p.70
- (2) 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編 平成29年7月〔歴史的分野〕(2) 身近な地域の歴史 p.92, 93
- (3) 福井延幸（目白学園中学校高等学校）
「中学校社会科『身近な地域の歴史』学習の研究—『落合』を素材として—」 目白大学短期大学部研究紀要第45号（2008年12月）
- (4) 同上
- (5) 『『神奈川の東海道』（下）—遙かな時代の道の賑わい—』第三章「物見遊山」 神奈川新聞社（2000年7月1日）
- (6) 磯子区制50周年記念事業委員会『磯子の史話』，（1978年6月30日）
- (7) 磯子区制50周年記念事業委員会『磯子の史話』，（1978年6月30日）
「はまれぽcom」の「磯子区のお寺で体験できる、江戸時代から伝わる「峯のお灸」って？」
- (8) 「時系列地形図閲覧ソフト 今昔マップ3」（埼玉大学教育学部 社会講座 人文地理学 谷謙二研究室）
- (9) Wikipediaによれば「町名の由来は、付近に植物のススキが多く見られたからである」とあるが、横浜市青葉区ホームページの「町名の遍歴・由来」では、「町名は武蔵野とススキは縁が深いもので、秋の七草の一つであると共に、よく繁茂する植物であることから、町の繁栄に願いを込めて『すすき野』と名付けた」としている。
- (10) Wikipediaでは、町名の由来は、「海から昇る朝日がきれいだと工事関係者の間で話題になったことから来ている。」としている。
- (11) 横浜市栄区ホームページ「栄区の町名とその由来」
- (12) 同「栄区の歴史」
- (13) 同上
- (14) 同上
- (15) 「栄区郷土史」栄区郷土史ハンドブック編集委員会 発行 横浜市酒区役所 地域振興課（平成27年3月）
- (16) 「栄の歴史」編集 栄の歴史編集委員会 発行 横浜市酒区役所 地域振興課（平成25年3月）

- (17) 「栄区郷土史」栄区郷土史ハンドブック編集委員会 発行 横浜市酒区役所 地域振興課 (平成27年3月)
- (18) 同上
- (19) 「ふれあいのまち六角橋商店街」ホームページ 「町の歴史」 地名の由来及び Wikipedia
- (20) 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説総合的な学習の時間編 平成29年7月 第3節 各学校が定める内容とは 2 目標を実現するにふさわしい探究課題 p.73, 74
- (21) 金沢区長による出前特別授業は、平成26年11月26日 (水) 六浦中学校体育館で行われた。
- (22) 元校長による講話は、平成27年1月27日 (木) 六浦中体育館で行われた。
- (23) 地域の方を招いての特別授業は平成27年2月23日 (月) に行われた。
- (24) 中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説社会編 p.6 (平成29年7月)
- (25) 同 p.17
- (26) 同 p.93